［メルディア］

一般財団法人メルディア広報誌

MELDIA

知的障がい者と共に

輝く

知的障がい者と共に

創る

花瀬琴音による取材 障がい者を応援！ いきいきと働こう！

朗真堂 × 花瀬琴音

布施博による取材 布施博が訊く

武蔵野千川福祉会 ×布施博

竹田朱里による取材 障がい児のためのサーフィンスクール

Ocean’s Love × 竹田朱里

人気連載エッセイ 知的障がいのある息子と私

水越けいこの「M size／はじまり」

月刊メルディア
VOL.9
TAKE FREE

MELDIA 2018 SEP. VOL.9

月刊メルディア 9月号 2018年7月25日発行（毎月1回25日発行）第9号 通巻9号
発行所／一般財団法人メルディア事務局 〒163-0632 東京都新宿区西新宿1-25-1 新宿センタービル32F

TAKE FREE

人の心を
創意工夫で繋ぐ
RO-MA-DO

東日本大震災で支援を受けたことの恩返し そんな気持ちから始まった福祉活動事業所

さいたま市・一般社団法人朗真堂

さいたま市でA型とB型の就労継続支援事業所を運営する「一般社団法人朗真堂（ろうまどう）」。その名前からも分かるように、障がいのある人でも毎日、朗らかに暮らせるよう、福祉活動を行っている。福祉とは全く無縁なIT業界にいたという代表理事の鈴木秀一さんは、この活動が面白くてたまらないという。家の近くに福祉施設があって、馴染みはあったものの、どういう形で成立しているのかが長年の疑問だったという女優&現役女子高生の花瀬琴音がその活動全般について聞いた。

和のデザインが美しい。
麻の葉から優しい光が
漏れ落ちるランプシェード。

コースター

朗真堂はここで働く人たちに
“一人ひとりが夢と志を”と
エールを送り続けている。

あたたかみのあるクラフトアートは
手に取る人の笑顔が想像できるデザイン。

事業が始まった理由は「恩返し」の気持ちから

花瀬　今日はよろしくお願いします。素敵なお名前の事業所さんですね。

鈴木　ありがとうございます。「朗らかな人たちが集まるお堂」（※読みは「ろうまどう」）、そんな場所を作りたい、ということでこんな風に名付けてみました。一言で言えば、行政から認可を受けた障がい者の就労施設を運営しています。13年の4月に設立したので、今年で5年位になります。

花瀬　どうしてこういった施設を始めようと思われたんですか？

鈴木　実は設立の経緯は11年3月の「東日本大震災」にあるんです。というのも、設立したメンバーの一人である私の従兄弟が、原発の影響が心配で福島県相馬市から小さい子ども3人を連れて私の家に避難してきたんです。でも、生活の公的援助が2年間しか続かない仕組みで、2年以内に自立しないとならないという状況でした。自立するに当たっては、どうせやるなら自分が受けた支援の恩返しで誰かを支援することをしたいと考えるようになりました。それで何をしようかと考えている中で、たまたま色々なつながりの中で障がい者施設をスタートすることになったんです。最初は自分は「関係者」くらいな認識だったのですが、運営していくうちに僕自身がこの仕事が面白くなってしまって。

花瀬　ここでは、どんな仕事をしていて、どんな方たちが働かれているんですか？

鈴木　13年4月の設立後、同年12月からA型事業所を、15年の2月からB型事業所をスタートさせました。A型がホームページの制作やグラフィックデザイン、イラスト制作などのIT関係で、B型が業務代行サービスやポスティングなどです。A型で10人、B型で11人の障がいのある人が働かれていますが、A型が精神と身体障がい者で、B型の11人のうち3人が知的障がい者です。うちでは古本の販売もやっているので、発送のための梱包作業や、お米の袋の底を補強する作業、シール貼りなどです。すごく丁寧な仕事をしてくれますよ。

花瀬　私の家の近くにも同じような施設があって、小学生の時に体験で一緒に作業をしたことがあるんです。その時もめちゃくちゃ丁寧でびっくりしたことがあります。

鈴木　それもそうですし、知的障がいの人は一言で言うと、変化が分かりやすいということですかね。うちだとだいたい月に1万5～6千円もらえるんですが、他の施設では5千円しかもらえてなかったりするんです。それでうちに来て働くようになったら、最初は身なりなんて気にしていなかった人が急にオシャレになったり、食べ物もおにぎり1個だったのが、お弁当になったり。そういう変化が早いんですよ。「もっと仕事したら工賃上がりますか」と聞いて来たから「もちろん上がるよ」って言うと、「じゃあ、もっと頑張るんで仕事取ってきて下さい」だなんて僕が尻を叩かれたりもします。

花瀬　それは確かに面白いですね。接する甲斐があるというか。ところでこの仕事を始める前に障がいのある人との関わりはあったんですか。

日々前向きに変化する その「早さ」が楽しみ

花瀬　この仕事を始めてみて大変だなって思うことってありますか。

鈴木　大変っていうのとは違うかもしれませんが、仕事が早く終わって「次の仕事ありませんか」と言われることがありますね。

花瀬　えっ、かっこいい！

鈴木　次の日でしたら、また仕事があるんですけれど、その日の仕事は今あるものだけということもあるんですね。

花瀬　先ほど、この仕事を始めてみたらご自身が面白くなってハマってしまったとおっしゃいましたが、そういうところが「面白い」ということになりますか？

鈴木　テレビや雑誌で障がいのある人を見たり聞いたりしたぐらいで、こういう施設があることは知っていましたが、特には無かったです。僕自身はIT業界の人間だったので、福祉の世界との縁もなかったですし。

たしかに先入観はあったが ただ単に知らなかっただけ

花瀬　では、始める前と後とで鈴木さん自身の心境の変化はありましたか？

鈴木　正直、最初は先入観がありました。でも

それはただ単に「知らなかったから」なんです。実際に話してみると、確かにまだまだ不得手なところがありますが、そうではない部分は変わらない。誰だってそうですが、もちろん僕にだって不得手なところがいろいろあります。今では、障がいの有無に関わらず、普通に働く「同僚」といった認識でいます。

花瀬　それでも、「難しいな」と感じる事ってありますか？

鈴木　施設の中だと僕らがそういった感覚だから良いんですが、ここから一歩でも外に出た時に一般の人はまだ以前の僕のような感覚なはずですから。「どうしても何か苦手なこともある」ので、人から注意を受ける度に苦手意識が働いてしまい、なかなか生活がうまくいかなくなってしまうケースがあります。彼らにだって出来る事はたくさんあるんですよ。でも周りの人は出来ない所ばかり気になってしまう。身近な人との接触だけならいいですが、それが世間一般となると、社会生活がなかなか送れなくなってしまう。そこが難しいと思いますね。

花瀬　私個人としてはあまり先入観みたいなものは感じないんですが、大人の人からはもっと気を遣いなさいと叱られたりします。障がいのある人たちにしてみると、どっちが良いんですか。

鈴木　それって花瀬さんの思いやりじゃないですか。だから、相手の方が思いやってもらいたいという時には正しいでしょうし、そうでない

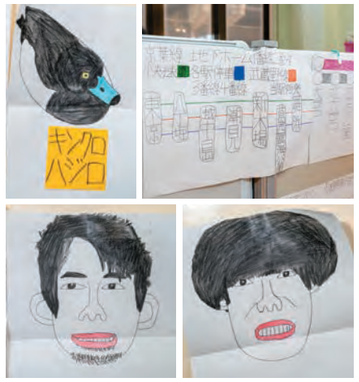
時は過剰なものになってしまうかもしれないですよね。でも、なんでも10回やって10回とも正しいことができるわけじゃないですから、自分が「思いやりたい」と思った時にそうすればいいだけなんじゃないですかね。

もっと関心を持って欲しい 接する機会を増やして欲しい

花瀬　なるほど、参考になりました。今までのお話も踏まえた上で、「月刊メルディア」を手にしたみなさんにお伝えしたいことはありますか。

鈴木　なかなかこういった施設に関心を持つ人はいないと思うんです。それでも障がいのある人たちについてもっと知ってもらいたいですね。僕が子どもの頃はクラスの中にも知的障がいのある生徒もいました。でも今は学校そのものが別々になっちゃっています。これは僕の考えですが、大人になってから「一緒になろうよ」、「一緒にやろうよ」と言うくらいなら、小さい頃から一緒にいた方が良いはずです。だから、みなさんもちょっとした触れ合いでもいいので、知的障がいのある人たちと接する機会をもっと増やして欲しいとは思いますね。

花瀬　私はたまたま近所に施設があって身近に感じていたところはあったので、サポートをされている方がどんな方たちで、施設がどうやって成り立っているのかが気になっていました。だから、今日お話を聞いていろいろなことが分かってとても勉強になりました。今日は本当にありがとうございました。



手描きの絵などが社内のあちこちに貼られ、雰囲気の良さが伺えます。コンビの似顔絵、誰だかわかりますか？

この活動が面白くてたまらないと言う鈴木さん。その言葉通り、鈴木さんの話ぶりは終始、生き生きと楽しそうだったのが印象的でした。（花瀬）

取材・花瀬琴音

MELDIA

一般財団法人「メルディア」とは

障がいのある人を支援する活動と、スポーツ（サッカー等）を行う児童・青少年を支援する活動を通じて、人々と社会に広く貢献することを目的として設立されました。

「メルディア」の基本理念

一般財団法人メルディアは社会的・経済的ハンディを抱える方々の「未来」に少しでも希望が持てるように、財団の活動を通じて支援し、社会貢献してまいります。

知的障がい者支援

障がい者の子供を持つ親の苦労や不安は計り知れないものがあります。
さらに、親が「片親」の場合は、経済的負担や苦労・不安もその親1人で背負わなければならない状況です。不安な生活の中で、情報交換もあまりできない方々の情報源となるような刊行誌を定期的に財団で作成し、そういった方々への有益な情報提供と、障がい者の持つ課題等を広く社会に知ってもらうこと、そして様々な企業や個人から、支援団体などに対する寄付を募ることを目的として、本誌「MELDIA（メルディア）」を発行し支援活動を行います。

青少年スポーツ支援事業

家庭の事情等で経済的に恵まれない 青少年のフットボーラーのための奨学制度

アルゼンチンのロサリオ出身のリオネル・メッシは、経済的に恵まれない低所得な家庭に生まれましたが、チームが彼を支援し彼も成長して世界を代表するフットボーラーとなりました。メッシは才能を評価され、たまたま支援を得られました。しかし青少年の中には、才能があっても経済的な家庭の事情で、サッカーをする環境に恵まれずに支援がないまま、選手としてプレイを諦めざるを得なかったり、適切な環境でプレイすることができない人たちもいます。そういう若者が、日本にも数多くいるのが実情です。
そのような青少年フットボーラーがプレイを継続するために、「頑張る人を支える奨学制度」を財団法人メルディアが実施し、社会に貢献をしたいと考えています。

財団概要

名　称　一般財団法人 メルディア
　　（英文名：general foundational juridical person MELDIA）
設立者　小池　信三
設立日　2017 年 5 月 23 日
所在地　〒163-0632
　　東京都新宿区西新宿 1-25-1
　　新宿センタービル 32F
電　話　03-5381-3213
ＵＲＬ　http://meldia.org/
ＭＡＩＬ　org@gf-meldia.com

ALL ABOUT MELDIA

「メルディア」とは？

「メルディア」とは、イタリア語である「メダリア」の造語で「メダルを」という意味です。財団メルディアは、『輝かしい人生』を手に入れて頂きたいという想いが込められた名称です。障がい者本人に加えその家族、また経済的な理由からスポーツが続けられない青少年など、「社会的なハンディキャップ」を持つ人々に対して『夢を諦めることなく挑戦することができる』ように支援をしていくことを目指しています。

MELDIA

布施博 × 武蔵野千川福祉会 東京都武蔵野市

東京都内でもかなり早い時期から作業所を立ち上げ 無認可小規模作業所時代を経て現在に至る社会福祉法人

1976年に、都内でも3番目となる作業所を立ち上げた「社会福祉法人武蔵野千川福祉会」は、今では10事業・17事業所を展開する大きな社会福祉法人だ。歴史の古さと事業規模の大きさだけでなく、同法人が運営する就労継続支援B型事業では、全国平均を大きく上回る工賃が保障されている。障がい者福祉の世界に入ったのは「たまたま」だったという同法人の常務理事・新堂薫さんに、法人運営全般と障がい者を巡る社会環境について聞いた。

布施博
Hiroshi Fuse

社会福祉法人
武蔵野千川福祉会／常務理事
新堂 薫
Kaoru Shindo

東京都下で3番目の認可作業所としてスタート

布施　法人の概要について教えて下さい。

新堂　1976年に東京都武蔵野市に千川作業所という小規模の作業所を開設したのが始まりです。なぜこの時期かと言うと、オイルショックで日本経済が低迷していた時代で、小さい会社や工場で働いていた障がいのある人たちが解雇されて行き場がなくなっちゃったんです。そこで、当時の親御さんや学校の先生方などが作業所を作ろうと動いた結果できた、東京都下で3番目の認可作業所です。

布施　じゃあ、もう40年以上の歴史がある作業所なんですね。

新堂　はい。またその頃はちょうど東京都が全国に先駆けて養護学校の義務化を始めた時期でもあるんです。それまでは「修学猶予・免除」と言って、障がいのある人たちは学校に行けませんでした。それが障がいが重くても養護学校に入れるという時代になった時に、では卒業後はどうするか？　という話になり、就職できる人はいいけれども、就職さえできない人たちもいるわけです。ですから、そういう人たちの行き場が必要になったわけです。

布施　そういう形で作業所がスタートしたと。そこからはどう発展したんですか？

新堂　87年に2番目の作業所が出来て、さらに02年に社会福祉法人の認可を取得しました。そうしながら徐々に事業も増やし、現在では生活介護、就労支援継続支援B型、共同生活援助、児童発達支援、放課後児童健全育成など、10事業・17事業所を運営しています。就労事業所の利用者が160名、グループホームが38名、児童が35名いて、職員50名、パートさん30名といった体制でやっています。

布施　そんなに多くの人が関わっているんですか。事業の特色として、他と比べてB型事業所での工賃が高いと聞いていますが。

新堂　はい。全国平均が今は1万5千円なんですが、うちの場合は作業所によって異なります

社会福祉法人武蔵野千川福祉会
東京都武蔵野市境南町 4-20-5
TEL : 0422-30-3010
http://www.musashino-senkawa.com/

が、一番高い所で9万8千円、安い所でも3万6千円をお支払いできています。

布施　それはまた全国平均と比べてずいぶんと高いですね。秘訣はどこにあるんですか？

新堂　営業をしっかりして良い仕事を取って来るということが1つ。それから、取って来た仕事を効率よく展開して生産性を上げるということがもう1つ。ですが、第一に考えているのは、障がいのある人たちが継続して働くことで「働く力を高めていく」ということですね。

布施　なるほど。就労継続支援を続けることで同時に生産性の向上にもつながっていると。仕事の内容はどういったものになりますか？

新堂　全部の作業所でDMの封入封緘作業を中心にやっています。中身としてはラベル貼り、チラシの封入などといったものですが、この仕事はお客さんが変わっても作業の中身自体がそれほど変わりませんから、繰り返しの作業の中で覚えてもらうことで技術や知識を高めることができます。だからこの仕事を選んでいます。一般の業者さんに比べると少しお値段もお安く設定しているので、お客様としても他より少し安くて丁寧な仕事で納期も守ってやって貰えるならということで仕事を頂いています。

布施　みなさんの働きぶりはいかがですか？

新堂　一つ一つ覚えていくと継続してできる仕事なので、すごくよく働いてもらっています。その中で大事にしているのが、「挨拶」と「返事」と「報告をする」ということです。

「たまたま」関わったことが「一生の仕事」になった

布施　ところで、新堂さんはどうして福祉の道に進まれたのでしょうか？

新藤　私が大学生だった80年代にボランティアで関わって、そのまま職員になったという流れです。ただ当時は経営が厳しかったので職員の待遇も悪くて。世の中はいくらでも就職先がある時代でしたから、親から反対されました。

布施　ボランティアで関わられてそのまま一生の仕事になったって言うんですから、偶然の出会いってすごいですね。

新堂　人に関わる仕事がしたいという気持ちがあって、「たまたま」というのが本音です。

布施　ご家族や周りに障がいのある人がいらっしゃったとかではなくてですか？

新堂　はい、私の周囲には障がいのある人はいませんでした。障がいがあってもみんな真剣に生きて働いているなっていうのがあったんです

挨拶と返事、報告を大事にしているというだけあって、作業に従事中も来客があれば元気で大きな挨拶の声が時折聞こえてきた。

ね。人間って、やはり生まれて来たからには自分の持っている力があって、それが精一杯生かせれば良いと思うんですよ。障がいのある人たちはそういう可能性を持つ人たちだと思うので、この社会の中でルールやマナーを守って精一杯の力で「やれることをやる」といったような、そういう人を育てるというところに魅力を感じたのだと思います。

理解は広がっている一方 現実には悲しい見方も

布施　これだけ幅広く多くの事業をやられていると色々と難しいことがあると思うんですが。

新堂　どうしても人手不足で。なかなかこういった仕事に就いてくれる人が見つからないですね。今、景気がいいですから、大学生の人たちはみなさん一般企業に就職してしまいます。それから、スタッフをどうやって育てていくかという人材育成ですね。

布施　施設の仕事は志がないとなかなかできる仕事じゃないですからね。そういった意味でも、障がいのある人たちを巡る社会全般の在り方についてどう思われますか？

新堂　介護保険の流れもあって、補助金や助成金が見直されている状況で、障がいのある人たちの権利を保障したり支援をするお金は国からもっと出して頂きたいと思います。

布施　やはり予算が足りないわけですか。理解不足があって必要なところに回っていないと。国会のドタバタを見ていても、政治として目を向けるべき方向が分かっているのか!?　って思っちゃいますね。「月刊メルディア」を読んでいる一般の人たちには何を期待されますか？

新堂　一般的には障がい者の理解が広がっていると言われますが、いざグループホームを建設しようとなると、「ここには建てないでくれ」という声が挙がるということがあります。総論は賛成なんだけれど、各論ではなかなか難しいですね。ですから、もっと理解して頂いて認めてもらえれば良いと思います。

実際に働いている方にも話を聞いてみた。柴田学さん（49）と小林茂雄さん（46）。多い時だと1日で1万3千枚ものラベルを貼る時もあるという。大変な集中力だ。

釣りが好きだという柴田さんは、話し好きなようでとても明るい。一方、お酒を楽しむのが好きという小林さんは照れ屋なよう。共に、働いてお金がもらえ、好きなことに使えるのが嬉しいと語っていた。

いつもお話を伺うと、障がい者という括りが本当に必要なのかと思う話をよく聞く。ここでもやはり同じだ。自分ももっと考えていきたい。（布施）

サーフィンスクールの様子。子どもたちは生き生きと水と戯れ、とても楽しんでいる様子だ。安全に配慮し、一人に対し数人のボランティアスタッフが付き、ライフガードも配置されている。

【認定特定非営利活動法人　Ocean's Love／オーシャンズラブ】　神奈川県茅ヶ崎市

サーフィンを通じて障がい児の可能性を伸ばす 親子だけでなくボランティアも成長できる場所

神奈川県茅ケ崎に本拠を置き、全国各地で小学校1年生から高校3年生までの知的・発達障がい児を対象にサーフィンスクールを開催する、「NPO法人Ocean's Love」。スポーツや習い事を自由に選ぶことが出来ない現実が障がい児の目の前には横たわるが、これを打ち破ろうとする同法人の活動について、スクール代表でプロサーファーのアンジェラ・磨紀・バーノンさんと、理事長の鈴木薫さんに、女優の竹田朱里が聞いた。

女優 竹田朱里 初取材!!

竹田　障がい児のサーフィンスクールというのはかなり珍しいんじゃないかと思いますが、どういうきっかけで始められたのですか？

アンジェラ　きっかけは、私の兄が障がい者で、その兄にも「頑張って学校にも行きたい」、「運動にも参加したい」という思いはあったけれども、現実的には難しかったんです。しかも、兄が幼い頃にいじめに遭ったりする姿を見る中で、「自分が大人になったら兄のような障がいのある人が住みやすい社会ができれば」という思いがあったというのが大本ですね。

竹田　ご自身のそういう体験がスクール開設の動機になったんですね。

アンジェラ　そして、私がプロサーファーになってからですが、カリフォルニアの自閉症の子どもたちへのサーフィンを通じた「ヒーリング活動」にボランティアとして参加したことがあったんです。自閉症の子どもたちなので、初めての環境や人に慣れるのに時間が掛かったんですけれど、ボードに乗って沖に行き、波に乗ったら、とびっきりの笑顔に変わったんです。その光景を見て、私がひとりの人間、ひとりのプロサーファーとしてこの世に生を受けた理由は、「この活動を日本でも開催することなんだ！」と一瞬で理解しました。

竹田　鈴木さんも一緒に立ち上げに参加したということですか？

アンジェラ　私と同じ企業にスポンサードを受けていたプロボディーボーダーだった理事長の（鈴木）薫さんと今の副理事長と私の3人でスタートしました。最初はその企業のイベントの一環で、障がい者のサーフィンスクールとして始まって、それが単独の組織になり、12年11月に現在の認定NPO法人を設立しました。

竹田　さっき、「使命」とおっしゃっていましたが、そういうものが見付けられるのが素敵なことだし、それを通じて社会を良くしていこうということも素敵ですし、一人の人の「生き方」としてもとても素敵なお話ですね。でも、いろいろ大変なこともあると思うんですが。

鈴木　NPO法人ですから、企業さんや個人の方からの寄付金から成り立っています。経営の安定化のために参加されるボランティアさんにも任意で千円を払って頂いています。本当にいろいろな人たちに支えられて活動できています。ボランティアに参加された方からは、「千円以上の価値がある」と言って頂いています。

竹田　子どもたち相手ということもあって、いろいろ気を使われることも多いと思います。

アンジェラ　私たちがボランティアさんたちにお話しているのは、「無限の可能性を信じてあげてください」ということです。実際に私の母が兄に接する様子を見て思ったのは、親が子どもの可能性を狭めている部分があるのではないか？　ということでした。スクールの時はボランティアさんがその子の家族になります。だから、「この子はこうだからボードの上に立てないだろうな」とか、「この子はコミュニケーションが苦手だから言っても仕方ないかな」とか考えるのではなく、ボランティアさんが子どもたちの無限の可能性を信じられたら、可能性は広がるはずなんです。それは障がいのある無しに関わらず、誰にでも言えることだと思います。

竹田　分かっていても、なかなか心をオープンにするのって難しいことですよね。

アンジェラ　固定観念を出来るだけ持たないようにするということだと思います。時には私も気付いたら固定観念を抱いていることがあります。しかし、そういう「壁を作らない」、「平らな関係を作る」ようにすることが必要だと思います。

竹田　子どもたちの安全面への配慮に関しては、どうされていますか？

左から、鈴木薫さん、アンジェラ・磨紀・バーノンさん、竹田朱里 ▶

認定特定非営利活動法人 Ocean's Love
神奈川県茅ケ崎市東海岸南 4-11-47
TEL：0467-81-5986
http://oceanslove.com/

アンジェラ　私たちは1人の子どもに4～6人が付いてサポートしているんですね。それは海での安全のためと子どもたちに社会性を学んでほしいからなんです。もちろんそれは、子どもたちをサポートする人が疲れた時に、すぐに誰かが代われるようにするためでもあるんですが。

竹田　チームワークも必要ですね。

アンジェラ　はい。そうやって支え合うことで、初めて会った人たちであっても、何年も一緒に仕事をしてきたかのようなチームワークが生まれるんです。それは心をオープンにしたからこそ生まれてくるもので、子どもたちも帰る頃には「(みんなと) 別れたくない」って泣き出しちゃう子もいて、それを見て貰い泣きするボランティアさんもいたりします。

竹田　それは素敵！　そんなことって滅多にないですよね。でも、障がいのある人だと引っ込み思案なところがあるでしょうから、参加するまでが大変ということはありませんか？

鈴木　最初のころはそうだったよね。

アンジェラ　そうなんですよ。3年前くらいは障がいを隠そうとする親御さんたちもおられたんですが、サーフィンじゃなくても「自分が親としてできないことを自身の子に何でもいいから体験させてやりたい」と考える親御さんが踏み出した大きな一歩があったからこそだと思うんです。そうして、私たちの活動も徐々に知られるようになりました。おかげさまで今では茅ケ崎では3人の応募に対して1人しか参加できないくらいの人気になりました。

竹田　素敵な体験が徐々に広まってきた結果ということですね。

アンジェラ　一番最初にスクールを開催した頃はまだ認知されていないですし、「サーフィンは危険なスポーツ」という見方もあったでしょうから、子どもたちを集めるだけでも苦労しました。たまたま、ある養護施設の園長先生が「子どもたちに何でもさせてやりたい」と考えていた方で、その方のおかげで子どもたちを集めることができたんです。その園長先生の勇気と子どもたちへの愛が無かったら、もしかしたら今のオーシャンズラブは無かったかもしれません。

竹田　その辺りも親御さんが最初から自分の子どもに対してストップを掛けがちだからということなんでしょうか。

鈴木　それはありますね。アンジェラさんのお母さんもそうでしたが、子どもにチャレンジもさせてあげるんだけど、ストップも同じくらい多く掛けてしまっている。私たちの活動においても、「お子さんは私たちがお預かりしますから」と、「写真も撮りたいでしょうが物影から見守るだけにしてください」と言っていますが、どうしても親御さんが前に出て来てしまうことも多いんです。「子どもをボードから落とさないようにしてください」とか言われることもあります。でも、サーフィンをするのにボードから落ちないなんてことはありえないじゃないですか。

アンジェラ　もちろん私たちも安全面への配慮からいろいろな事前調査をするなどして、子どもの苦手なことを把握するようにしています。中には、「うちの子どもを水に潜らせないようにしてください」という親御さんがおられるんです。そんな親御さんも最初は様子見をしているんですが、子どもたちが水に落ちても楽しそうな顔をしているのを見て、「うちの子、けっこう大丈夫なんですね」だなんておっしゃるケースが何度もありました。やはり親御さんが先にストップさせてしまっているんですよね。

竹田　最初のお話の通り、子どもたちの可能性を信じて何でもやらせてみることが必要ということなんですね。

アンジェラ　「大事だからこそ護りたい」と親御さんが思うのは私たちも十分承知しています。でも、「護りたい」という気持ちを少しずつでもリリースして、「親離れ・子離れ」をさせてあげることで、その子が大きく成長できることを分かって欲しいですね。絶対出来ないと思っていたことを自分の子どもが出来た時に、良い意味での「驚き」を感じてもらうことは私たちも本当に嬉しいですし、そうすることで親と子の双方が変わっていくことが出来ると思うんです。こうなると、子どもたちが自信を持つようになって、サーフィン以外のことも出来るようになって行くはずです。自信や勇気が「次のもの」へと繋がって行くんだと思います。

鈴木　水が怖くてシャワーを浴びることさえ出来なかった子どもが、学校のプールの時間に自分から進んで水に飛び込んだりすることもあったそうです。学校の先生が驚いて「夏休みに何があったんですか?」と聞いてきたそうで、親御さんが「実はオーシャンズラブというのがあって」と説明した、だなんていう話を聞くこともありました。

竹田　面白いエピソードですね。今後の課題や抱負についてお聞かせ下さい。

鈴木　私たちの理想としては、障がい児と健常児を特に分けないサーフィンスクール、つまり子どもたちがみんなで通えるサーフィンスクールにできたら良いな、と。現状では問題があるからクラスを分けているんですが、本当は分けて考えたくないんです。私たちの活動が広がって、そういった壁のない、誰にも優しい社会に変わって行ってくれればいいなと思います。

竹田　障がいのある無しとに関わらず、人の可能性を第一に考えているって、本当に良いことだなって思いました。また、その活動を続けてらっしゃるお2人の心の広さ、そして、お2人の活動に賛同して自分の子どもを預ける親御さんの勇気も大事なんだなと思いました。お話を聞かせて頂いてありがとうございました。

▲3人に1人しか参加できないサーフィンスクール。開始前の安全に関してのアナウンスの様子。

Msize
エムサイズ

はじまり

＜水越けいこ 連載＞ 9

シンガーソングライター
水越 けいこ
山梨県生まれ。1978年「幸せをありがとう」でデビュー。TBSの朝の情報番組「8時の空」に田中星児と共にレギュラー出演。その後、「ほほにキスして」「Too Far Away」がヒット。現在はダウン症を持つ息子・麗良と2人暮らしをしながら音楽活動と公演活動を続けている。

私が食を考える「はじまり」友人とお子さんのエピソード

今年も随分と暑い季節になって参りました。暑くなるにつれて私自身は食欲が落ちてしまいますが、息子の麗良（れいら）は季節に関係なく食欲が旺盛です。今回は息子も含めた「ダウン症と食」の話をしたいと思います。

ある時、私の息子と同じダウン症のお子さんを持つ友人が深刻な顔をして我が家に来ました。いつもは元気な彼女なのですが、とても思い悩んでいるように見えました。話を聞いてみると、彼女は「和樹（※仮名）が食事をする時、喉が詰まるような状態が頻繁に起きてしまっている」という話をし始めました。

病院で診察を受けると、「人の喉には、空気と食べ物を判別し、それぞれを肺や胃に運ぶ機能がありますが、その部位が摩耗してきている状況」だとの診断が下ったそうです。

和樹君の事は、彼が幼い頃から知っていて、いつも美味しそうに食事をする姿を見ていましたから、そのことにとてもショックを受けました。「いつも嬉しそうに食べていた和樹君が食事を摂れなくなるかも知れないんだ」と想像し、思わず泣いてしまいました。

ダウン症の子どもに限らず、自分の子どもが何らかの原因で「普通に食事が出来なくなってしまう」と考えなければいけないだなんて、親としてこれほど悲しいことはありません。

それまではあまり意識をしていなかった息子の「食」に対する私の意識も、その時から変化して行ったのは言うまでもありません。

まず和樹君は、食べ物を全て小さく切る訓練から始めました。大好きなステーキもスパゲティーも、「まずは小さく切ってから食べよう」と教えていったそうです。最初は、食事を前に10分も掛けて食べ物を小さく切っていく訳ですから、本人は随分戸惑ったようです。

しかし、友人夫妻は長い時間を掛けて、根気強く和樹君に教えていきました。彼が通う施設の方にも毎食の管理をお願いしたといいます。

10年にも渡る努力が実り、和樹君はどんなものでも小さく切り、またゆっくり食べる事を覚えました。ただ、食べる時間は長く掛かってしまうようですが、嬉しいことに今でも好きな物を食べることが出来ているそうです。

一般的に、ダウン症を持つ人たちは、健常の人たちより、身体が弱い事は確かです。だからこそ大切だと思っている事、その一つが「食」です。私も母として、息子が美味しい食事を摂り続けられるよう努力し続けたいと思います。

自主的には会えない友人たち機会を積極的に作ってあげる

先にも書きましたが、私には色々な友人関係があります。一つは息子を通じての友人関係、もう一つは仕事を通じての友人関係。大別するとこの二つになるような気がします。

私の息子はダウン症を持っていますので、一般の人に比べ、息子自らが、積極的に人との関係を育んでいくのは難しい部分があります。よって、私の友人関係、もっと言えば私の人間関係と、息子の友人関係と人間関係は、とても共通する部分が作られていきます。そこで気を付けている幾つかのことや、エピソードなどを挙げてみたいと思います。

息子を通じての友人関係、同じ障がいのある親御さんとの出会いは、息子が小学校や中学校に通う頃が多かったです。手の掛かる年齢の時の方が、より学校に行く機会が多くて、親同士で話し合う機会も多かったからだと思います。

どうにか一人で学校に通えるようになること、それはもちろん嬉しいのですが、ある側面では、他の親御さんとの交流が減ってしまいます。つまり、会う機会がどうしても少なくなってしまう方たちが必ず出て来てしまいます。そこにも気を遣わなければなりません。

健常のお子さんでしたら、小学校や中学校を卒業しても、自らの意思で旧友に連絡を取ったり、会いに行ったりすることが可能です。しかし、ダウン症を持つ多くの子どもたちが、そのような自主的な行動が出来ません。友達に会いに行きたくても周囲の手を借りなければ、その機会さえ作れないのです。大げさに言えば、親である私たちの人間関係の有無により、子供に寂しい思いをさせてしまう可能性もあります。

いつからか、私がこれに気が付いた時から、折をみて懐かしい方たちにも連絡を取って、その方たちのお子さんらとも積極的に会うようにしてきました。

もう一つの人間関係、仕事を通じての友人ですが、私の仕事がシンガーソングライターであるので、周りの友人はミュージシャンやスタッフなど音楽関係の方が多いのです。彼ら（彼女ら）には良い人が多いので、息子もその人たちの事をとても気に入ってくれています。

しかし、ここでも気を付けなければならない事があります。この友人たちとは、仕事で会う機会がほとんどです。友人らが忙しいせいもあってか、息子がその人たちのことを大好きでも、1年以上も会えないということも多くありました。大人にとっては1年くらいのブランクは大した期間ではありません。でも、子どもにとっては、その1年がとても長い時間になってしまいます。そのため、仕事の現場に積極的に息子を連れて行くようにしていました。

息子には、いつも良い人間関係に恵まれていて欲しいです。これからも親として出来ることを続けて行けたら良いと思っています。

水越けいこ「僕の気持ち」絶賛発売中！

障がい者スタッフの労働力は とても大きい

障がい者雇用の更なる普及に期待が膨らむ

Homemade bread peterpan

社会福祉法人 足利むつみ会／セルプ絆
ピーターパン 栃木県足利市
● 取材＆文・大橋はるか

栃木県足利市にある「社会福祉法人足利むつみ会」が運営するパン屋「ピーターパン」。広々としたキレイな店内にはイートインスペースも完備されていて、地域住民の交流の場にもなっているようです。地域の中で知的障がい者の働く場を作ろうという趣旨で作られたこのお店では、努力を惜しまず熱意を持って働く障がい者スタッフの姿がありました。

今回は、この「ピーターパン」を運営する「足利むつみ会」「セルプ絆」の改田恭子さん、阿由葉洋平さんにお話を伺ってきました。

地域に根差したパン屋さん 懸命に働く障がい者スタッフ

大橋　こちらのお店「ピーターパン」の紹介をお願いします。

改田　社会福祉法人「足利むつみ会」が運営する「セルプ絆」という事業所で、就労継続支援B型事業で生産活動として実施しているパン屋が「ピーターパン」です。

大橋　とてもキレイな施設なので、開業からそれほど経ってないのかと思いました。

改田　清掃業者にも依頼はしているのですが、利用者の方たちが一生懸命に毎日掃除をしてくれているんです。お子さんたちが遊べるスペースもあるので衛生面には気を付けています。

大橋　開業までの経緯をお聞かせください。

改田　このお店は平成23年9月にオープンしてもう少しで丸7年になります。実はその前身で今から15年程前に、この法人の本部でパンの事業自体は始めていたんです。その時は今のように店舗を構えておらず、出張販売を主にしていたんですね。その時にも、ある程度の安定した収入はあったのですが、「地域の中に出てパンを売りたい」という思いが理事長の心の中にあったようなんです。それで、地域の中に出て障がい者が働ける場所を作りましょうということで、このお店をオープンさせました。

大橋　作業として「パンの製造」と「パンの販売」を選ばれた理由はなんですか？

改田　何かの下請けとかではなく、「自分たちのオリジナルの製品を作っていきましょう」という中で、比較的取り掛かりやすかったのがクッキーやパンの製造だったんです。このお店のすぐそばに、昔からこの地域で馴染みのあるパン屋さんがあったのですが、そこの店主さんが「ピーターパン」に技術を提供して下さったんです。もうそちらのお店は廃業されたのですが、その味も残していこうということで始めたのが理由になります。

大橋　こちらで働かれてる利用者（障がい者スタッフ）さんの作業内容を教えてください。

改田　パンの技術というのは、なかなかすぐに身に付くものではないので、基本的には製造の補助や調理パンのフィリング（パンに挟む惣菜など）作り、販売ですね。あと、うちは出張販売もしているので、販売先への商品の仕分けなどもやってもらっています。

大橋　すごいですね。私は料理が苦手なので「フィリング作り」さえ厳しいかもしれないです。利用者さんたちは特に問題なく作業をされていますか？

改田　やはり「商品」ですから、品質は保たなければならないし、見た目も大事になってきます。パンの袋詰めひとつにしても、袋の大きさを選んで、汚れないように入れて、袋の閉じ方もキレイに仕上げるっていう、一連の流れの中に気を遣うポイントがいくつかあります。「ピーターパン」の利用者の方たちは中～軽度の知的障がいのある人がほとんどなんですが、その方たちでも繰り返し経験していくことで作業の完遂度（完成度）が高まっていくので、誰でもすぐに出来る作業というわけではないですね。

大橋　私たちも初めから仕事が出来るわけではないし、やっていくうちに覚えていくのが仕事の基本ですもんね。利用者さんの働きぶりというのはどんな感じですか？

改田　これは個人的に思うことですが、自信を持って言えることがあります。ここで働く利用

者さんたちは地道に努力をされる方が多くて、仕事に対しても一生懸命やる方ばかりです。それこそ全然お休みもしませんし、きっと私たち職員よりも「ピーターパン」を愛してるんじゃないかな？　っていうくらい仕事に対しては熱意を持って取り組んでいるようです。自分の力を100パーセント惜しみなく発揮していただいている気がします。そこは、私たちも見習わなくてはならない部分だなと思います。

大橋　本当ですね。私はその日の気分や体調によっては「今日は仕事行きたくない」だなんて思うこともありますから。まっすぐで一生懸命に努力する姿勢は見習いたいと思います。

改田　彼らのそういう姿を見ると周囲も「頑張らなくちゃ」と思わされますよね。

大橋　そう思います。ところで、作業の分担などはどのように決めているんですか？

改田　パンの製造って、すごく早い時間から始めなければならないんですね。職員は朝の5時頃から出勤しているんですけれど、利用者の方が行う製造補助の作業と販売の作業とでは就労の時間帯が異なります。だから、シフトを組んでいて、その中で彼らが働きたい時間と作業内容とで調整をし、適職を見定めてご本人と相談しながら仕事の内容を決めています。

社会福祉法人
足利むつみ会
セルプ絆／管理者

改田恭子
Kyoko Kaida

大橋　その人に合った働き方や時間の使い方が出来るということになりますね。

改田　生活のスタイルとかリズムというのは大事な部分です。ましてやここは通所施設で、全員がご自宅から通われているので、そういった事に配慮をしながら、彼らが働くことが可能な時間の中で作業を組み立てています。

大橋　障がい者スタッフと健常者スタッフの関係性はどんな感じですか？

改田　職員の方は、技術のある者が揃っているのでそれはパン屋としては欠かせない存在ですが、補助的な細かい作業がたくさんあるので職員だけでは絶対に遂行できません。ですから、そういった所に利用者の方に携わっていただいて、バランス良くみんなで力を合わせてパンを作る、という風になっています。双方とも「なくてはならない存在」になっていますね。

大橋　この先、知的障がいのある人たちとの関係をどのように進めていこうとお考えですか？

改田　「ピーターパン」での作業は一般の方との接点がとても多いお仕事です。利用者さんにとっては職場であるのと同時に、社会参加が出来る場所でもあります。利用者の方たちが毎日ここへ来て一生懸命に作業してくれているという所をアピールするためにも、障がいのある人たちが社会参加の出来るステージとしても、きちんと事業を運営し、それを確立し、継続していくのが私たちの責務なのかなと思います。

大橋　社会参加が出来る職場は貴重ですよね。

改田　そうですね。利用者さんが作業した分は工賃として還元しているので、その支給額も少しずつ上げていって、経済的な自立にも繋がれば良いなと思います。

大橋　これから先に何か新しい事業などは考えていらっしゃいますか？

改田　まずはここのお店をしっかり作っていく事が一番ですね。せっかくお店を構えたからには、「ピーターパン」はもちろん、ここで作業する利用者の方たちが、地域づくりの担い手になっていけたらと思います。また、街づくりにも貢献が出来たら良いなと思います。

大橋　「月刊メルディア」を通して一般の人たちに伝えたいことはありますか？

改田　将来的には日本の労働人口が少なくなってしまうとも言われていますよね。そんな中で障がいのある人たちの労働力って、すごく大きいもので、将来的にはさらに重要なものになってくると思うんです。当店に限らず、知的障がいのある人たちが働くお店も全国には多くあります。そこに足を運んでいただくことで、障がいのある人たちへの理解を少しずつでも深めていただければと思います。

社会福祉法人
足利むつみ会

阿由葉洋平
Youhei Ayuha

この「ピーターパン」を運営する「セルプ絆」の本部である「社会福祉法人 足利むつみ会」の阿由葉洋平さんにもお話を伺いました。

大橋　早速パンをいただきました。とても美味しいですね。美味しさの秘訣はなんですか？

阿由葉　ここは小麦粉の選定から発酵まで全てお店でやっているんです。既に発酵した冷凍生地を使っているパン屋さんもあるので、その違いは大きいのかもしれないです。

大橋　近所にあったパン屋さんから技術提供を受けたと聞きました。

阿由葉　そうなんです。この「ピーターパン」の場所なんですが、元々ここには私の実家があったんです。そのせいで、子どもの頃からその近所のパン屋さんでパンを買って食べていたんですよ。改田も言っていたように、そちらが廃業される事を知り、どうにかその味を残したい、技術を継承したいと思い、数年に渡って製パンの指導をしていただきました。

大橋　地域の人たちの思い出の味。読者の皆さんにも味わっていただきたいと思います。

美味しいパンとクッキーのお店「peterpan」
栃木県足利市元学町830-13
TEL. 0284-41-3291
営業時間/7:30〜18:00（定休日：日・月・祝）
http://www.mutumikai.ecnet.jp/

知的障がい者の声を聞く

つむぐ

～こえをきく～

Special Interview

今回の対談相手は本誌に連載を持つ、水越けいこさんの息子さん「レイくん」です。この対談を行ったのは春、場所は屋外とあって、うららかな雰囲気の中で対談は進みましたが、今回の彼との対談は「会話」に対する私の価値観を少し変えるものになりました。

取材・文 渡邊 希望 脚本家・俳優
1988年神奈川県生まれ。大学時代に現代小説を専攻。2015年「劇団ショートホープ」を立ち上げる。活動は脚本家と俳優に留まらず演出家としても活躍し、音響も手掛けるなど、多岐に渡って才能を発揮する。

音楽とダンスが大好きな人 何かを見極めようとする人

今回の対談は解放感のある屋外で行いました。待ち合わせ場所であるバルコニーへ向かうと、そこには対談相手の「レイくん」が私より先に来ていました。

レイくんは私を見つけると手を挙げ、「よっ」と気さくに挨拶をしてくれました。私も同じように「よっ」と声を掛けました。

レイくんも私も白いシャツを着ていたので、「お揃いだね」と尋ねてみると、楽しそうに笑い返してくれました。

レイくんは私のことを「のんちゃん」と呼びます。彼にとっては、その方が呼びやすいのだそうです。ニックネームで呼ばれて悪い気はしません。私も、「レイくん」と、そのまま気さくに呼ぶことにしました。

まず趣味を聞きました。彼は、「ダンスと音楽」だと答えました。「ポーズを取ってみて」と私がお願いすると、本格的でキレの良い動きでそれに応えてくれました。

聞けば、レイくんはダンスを習っているそうで、好きなアーティストはマイケル・ジャクソンなのだそうです。

対談中に出てきた音楽の話題の中で、過去にレイくんが聴きに行ったコンサートについて話すシーンがありました。

その時のレイくんの意見はとても明確で、「ここをこうした方が好き」というような専門的な話もしてくれました。音楽が好きだという事がしっかりと私にも伝わりました。

私も好きな音楽について述べたりと、二人で楽しく会話をしていくうち、ふと気づいたことがありました。

それは、「今二人で話している内容は誰（なに）についてなのか」をレイくんは毎回頻繁に確認しているということでした。

レイくんのことについて私が訪ねると、彼は自分を指さして「私?」と聞いてきます。反対に、私が自分のことについて語っている時は「のんちゃんが?」と聞いてきます。彼は毎回、誰が誰の話をしているのかを明確にしたうえで話を進めたいようでした。

それは、レイくんなりに話を整理しているからなのでしょうが、会話の主語を確認する彼の目はとても真剣に見えました。

レイくんがパン屋で働き始めたとの話を聞いていたので、仕事についても彼に聞いてみると、「仕事をこなしているという感覚が楽しい」と答えてくれました。

反対に、嫌なことはあるのかを尋ねてみると、レイくんは少し悩んだ後、「嫌じゃなくて苦手なことね」と私の言葉を直し、「難しい仕事が続くこと」と言ったのでした。

これらの会話で、レイくんが主語について質問した際に見せた、あの真剣な目線に納得が行ったように感じました。

レイくんは、「一つ一つの事象を正確に積み重ねていくこと」が好きなのではないだろうかと思い当たったのです。

仕事を「こなしていく」という感覚も、会話の際に主語を明確にすることも、「嫌」と「苦手」を分けるところもそうです。

レイくんと会話をして「楽しい」と感じたのは、意見の交換が確実にできているという感覚から来たものかもしれません。

考えてみれば、私たちは普段の会話の中で、相手に意図が伝わったのか、伝わっていないのか、を曖昧にしてしまう場面は少なくありません。会話としては成立しているものの、お互いの意見を真に理解しながら話をしている時間はどれだけあるでしょうか。

私は会話とは深いものだと、ある意味で当たり前のことを考えながら、二人の会話を「積み重ねて」いると、取材スタッフが撮影のためカメラを構えました。

すると、たちまちレイくんは二人で積み重ねていたはずの会話を止め、カメラに向けて楽しげにポーズを取りました。

それはまるで、「積み重ねるとかそんなことはどうでも良い」と言わんばかりの勢いで、「難しく考えなくて良いんだよ、のんちゃん」とレイくんに言われたかのような気がしました。

災害時に健常者以上の困難を強いられる障がい者。その深刻な現実と山積する課題について考える。

6月18日朝に大阪北部を襲った大地震では、多くの方が被害に遭われ、今後の酷暑を前にしてさらなる苦難を強いられることもあるかもしれない。まずは、お見舞いを申し上げ、一刻も早い復旧がなされるよう祈念します。こうした大きな災害が起こった際には、時として避難が強いられ、日常をはく奪された生活には多大なストレスがかかるものだ。ましてや、普段から負荷の高い生活を送り、周囲環境への適応が困難な障がい者にとっては相当なものがあるはずだ。障がい者が災害に遭遇した時の難しさについて考えてみたい。

編集部

THE 取材!

ある自治体が知的障がいのある人とその家族を対象にして配布している「災害時初動行動マニュアル」を見ると、啓蒙の意図は伝わるのだが、具体的な行動指針という観点から見ればとてもおぼつかない。「自身の身を守れるように（中略）しっかりと準備しておくことが大切です」。当たり前のことだろう。障がい者に向けても「周りの人への手助けをお願いするヘルプカードを準備しておきましょう」とも言っているが、大抵の人は障がい者への接し方に慣れていないのが現実だ。災害時の、ともすればヒステリックになりがちな現場の混乱が想定されているとはとても思えない。

そこで、〝実情〟を知るために現場からの報告を見てみよう。障がいのある人からのお願いとして、こんなことが綴られている。

一つは避難先の確保。福祉避難所が近所にあってそこまでの導線が確保されていれば良いが、そうともいかないことが多いだろう。だから、通常の避難所への導線の確保と避難所内での生活の確保が求められている。周囲の環境への適応が苦手な知的障がいのある人でも居られる場所がないと、とても辛いことになる。健常者を前提とした情報提供では、それに取り残されてしまう人が生まれる。どんな人でも非常時に的確な情報が得られる情報ソースが、災害が起こる前から準備されていて、実際に届けられるようでなければならない。

そしてさらに、配慮がなされる体制があるかどうか。家族など、身近な人が近くにいればいいが、災害時には散り散りバラバラになることがある。その場合、特定の障がい者に対しては健常者とは違った配慮が必要だ。いろいろな人がいて当たり前、といった社会的前提があればいいが、ともすれば排除の論理が働いてしまうことも懸念される。

障害者関係団体連絡協議会などが東日本大震災後にまとめた研究でも、やはり同様の問題が課題として報告されている。「福祉避難所の存在が障がい当事者にも福祉関係者にも認識されていなかった」ともされているので、やはり〝非常時〟に対していかに無頓着でかつ、周知の徹底がなされていなかったかが認められる。

その中、日本知的障害者福祉協会が示した課題として、「福祉サービスを利用していない障がい児者やその家族については被災状況が分からず、支援もできなかった」という課題が見受けられる。これは深刻な問題と言えるだろう。恐らくは、必要な情報の伝達も図れず、完全な社会的孤立を強いられたのではないか。

また、一般の避難所はおろか、福祉避難所が機能しなかったという課題も挙げられている。これに関しては、知的に限らず障がい者全般への社会的理解の遅れが起因しているのではないだろうかとさえ思える。一方で、災害後の復旧・復興時の課題として、仮設住宅における介護等のサポート拠点が高齢者のサポートに偏っていたことが推測されてもいる。これなどもやはり社会的理解の不足と、政治・行政の向いている方向が、同じ社会的弱者でも目に見えやすい高齢者の方に偏っているためだろう。

もう一度、現場の声に耳を傾けてみよう。避難所に行けなかった障がい者とその家族についてレポートした記事では、こんな家族の声を紹介している。

「障がいのある者がいる家族は、そうでない家族の何十倍も大変です。大勢の人がいる避難所では暮らせず、といって他に行く場所もありません。この家にもいつまでいられるか分からないし、毎日ハラハラしています」とし、それでも避難直後に避難所に身を寄せていた際、障がいのある娘が夜ごと大声をあげるために、「娘の口をガムテープで塞ごうかとも思いました」と、あまりにも悲痛な苦しみを訴えているのだ。

結果、この一家は避難所を出て行かざるを得なくなり、先ほどのハラハラした生活を強いられることになった。

災害時だから、全ての被災者が困難と我慢を強いられるのは仕方ない。ところが障がい者の場合だと、加えて支援・救済が届きにくいという現実はもっと考えられるべきだろう。

東日本大震災で見えた障がい者が味わった困難を考えれば、今回の大阪の大地震を含め、現場でいかに辛い思いをしているかが自ずと推測される。

知的障がい児にも相性抜群の意思疎通ツール

身体を使ったコミュニケーションを図る教室

株式会社ネクスト イノベーション
スタジオ ラス／ 埼玉県春日部市

近年、様々なカルチャースクールが生まれている。その中でも「ヨガ」は人気の高いコンテンツで、増加の勢いが強く、ヨガに対する関心やニーズが高いという証拠でもある。もともと、大人の女性に人気のあるヨガだが、キッズ、高齢者、障がい者からもヨガのニーズは高まっており、教室に通う年齢層や性別、職業も広がって来ている。知的障がい児を専門に教えるヨガ教室が埼玉にある。一般のクラスに知的障がい児が混ざるのとは異なり、施設で知的障がい児に特化してヨガを教えるカルチャースクールに取材を行った。

取材＆文・金子智昭
スポーツトレーナー

肩を上にギュッとしてから、力を抜いてダラーン。もう一回やるよ～。みんな上手だね！

みんなで足をくっつけて円を作ってみよう！足の先を触るよ～。体が伸びて気持ちいいよー

「療育」の最前線を取材！きっかけはキッズのヨガ教室

金子　ヨガの出張スクールを展開しているとのことですが、どのような内容ですか？

猪狩　スタジオを持っていますので、通常のヨガ教室も開催していますが、キッズやその他、ニーズに応じて、オープンな場所でのヨガ教室も各所で開催しています。大人のクラスになると天井から布を垂らして、それに掴まったり、巻き付いたりして行う「エアリアルヨガ」という特殊なヨガも教えています。

金子　知的障がい児との関わりについて教えてください。

猪狩　現在、「シェルフ」という通所型の児童発達支援施設でヨガ教室を開催しています。

金子　なぜそこでヨガを始めたのでしょう？

猪狩　知的障がいのある子どもを育てているママ友の存在がきっかけでした。ママ友同士で何か応援できないかと考えて、まずは「子ども食堂」を始めました。それが、そもそものスタートで、ヨガは後に教えることになります。

金子　「子ども食堂」とは？

猪狩　最近、「子どもの食事を見直そう」という動きが全国で見られますよね？　私たちの住む地域にもそうした活動が必要だと思いました。それと、「ママ友同士で支え合う」という意味で始めました。

金子　ヨガを教える上で、特に意識していることはありますか？

猪狩　知的障がいのある無しに関わらず、教える時は目で伝えようと意識しています。子どもと接するときは、まずは信頼関係を築くことが大事だと思っています。目を見て話しをすることで心を開いてくれることが良くあるんです。時間は掛かりますけどね。

金子　知的障がいのある子どもたちにヨガを教える上で、苦労や特に思い出に残る経験などがあれば教えてください。

猪狩　施設で知的障がい児にヨガを教え始めたところですかね。健常の幼児でもそうですけれど、知らない大人の女性が来て、マットを敷いて、いざヨガを教えようとしても、子どもはなかなかやってくれないんです。福祉施設では特にそうで、「みんな集まって！」と、声を掛けても誰も近寄ってくれませんでした。初めは、私が独りでポーズをとっているだけの状態でした。

金子　それは辛い経験ですね。

猪狩　みんながなかなかやってくれない事は、最初からある程度の覚悟をしていたので、辛くはなかったんです。とにかく、「子どもたちと心を通わせるにはどうしたらいいか？」考えました。一生懸命、子どもの目を見ながら語りかけて、いろんなポーズを見せていました。それから一ヶ月くらい経った頃だったと思います。初めは全く興味を示さなかったお子さんがある日、私のポーズを真似し始めたんです。すると、一人、また一人と、ポーズを真似る子が増えていったんです。その時は、鳥肌が立つくらい感動してしまって、ウルウルしちゃいました。

金子　それは、すごい経験ですね。

猪狩　ヨガがコミュニケーションのツールとして機能するんだ、価値があるんだ、と感じた瞬間でもありました。

金子　ヨガでコミュニケーションですか。

猪狩　福祉施設から自宅に帰ったお子さんが、ご家族の方に、「今日、こんなことしたよ」って、言葉で伝えるのは難しいことかもしれません。でも、家でヨガのポーズを思い出しながら真似してみるだけで、ご家族の方は「おっ、今日はいつもと違うことをやってきたのかな？」って気付くそうです。福祉施設でのお子さんの様子がご家族の人たちに直接伝わるようです。

金子　身体を使って周囲に報告するんですね。

猪狩　ヨガのクラスを通じて、私の気持ちがお子さんたちに伝わり、心が通じ合って、その子の気持ちや経験がご家族に伝わっていく。良い循環を作ってくれるのがヨガなんです。

金子　それが魅力ですね。最後に、障がいのあるお子さんを持つ方にメッセージを下さい。

猪狩　私はヨガを通して、子どもの可能性の大きさに改めて驚かされました。お父さん、お母さん、自信を持ってお子さんといろいろなことにチャレンジしていって欲しいと思います。

NEXT INNOVATION.CO.,LTD／代表取締役
スタジオ ラス／代表、
猪狩氷青 HYOSEI IGARI

スタジオ ラス／(株)ネクスト イノベーション
埼玉県春日部市豊町 4-6-7 2F
TEL : 048-884-8383

http://www.next-innovation525.com/yogastudio.html

イベント情報&店舗情報など

知的障がい者が働く企業・団体からの情報や告知

知的障がい者が働く施設や団体のイベント情報、その他の情報または
各種の告知を掲載しています。

お店紹介

美味しいパンとクッキーのお店「ピーターパン」

■場所
栃木県足利市元学町830−13
TEL:0284-41-3291
■営業時間
7:30〜18:00
■定休日
日曜、月曜、祝日、年末年始など
■ホームページ　http://www.mutumikai.ecnet.jp/

店内に70種類ほど並ぶパンは、ドリンクバーやキッズスペースを備えた「イートインスペース」でもお召し上がりいただけます。

参加募集

全国の障がい者施設の商品&販売場所募集!!

■場所
東京都渋谷区代々木3-1-16
■お問い合わせ　TEL:090-8454-2409
■メールアドレス　binbin889@hotmail.com
■ホームページ　http://arigatoshop.jp/

●障がい者施設で作った、御社のための商品ギフト、ノベルティ100個から。
●美味しいお菓子のセット4000円から「ありがとうショップ 障がい者」で検索。
●主催／社団法人ありがとうショップ
全国社会福祉協議会、セルプセンタ多数、工賃アップの講師をしています。

お便り募集！　あなたが知りたいことを あなたに代わって編集部が調べます

読者の方々が知的障がいに関して「知りたいこと」、「疑問・質問」、「法的な情報」、「扶助情報」などをみなさんに代わって編集部が調べ、取材し、記事にしたいと思います。「こんなことを調べて欲しい」、「こんな情報があるが詳細が知りたい」など、どんなことでも構いません。編集部までお寄せください。左ページに記載の「一般財団法人メルディア事務局」まで、メールまたは郵便にてお送りください。

※お寄せいただくご要望の全部にお応えすることはできません。また、掲載する記事に関してはメルディア事務局ならびに編集部にて選択させていただきます。予めご了承ください。

募集&告知

各種募集と告知

知的障がい者向けの就労情報や各種告知と募集を掲載しています。
布施博または大矢真那が取材に伺う「訪問先」も募集しています。

布施博&大矢真那の訪問先／取材先を募集しています

知的障がい者を雇用する企業や団体、知的障がい者施設、学校、場所、スポーツ会場などへ布施博または大矢真那が直接お伺いして取材させていただき、本誌にてご紹介いたします。

■応募条件
知的障がい者を雇用している（雇用予定を含む）企業や団体、知的障がい者施設（学校を含む）、知的障がい者が活躍されているスポーツ団体、スポーツ大会、地域、場所など
■お問い合わせ
下欄にある「一般財団法人メルディア」事務局まで電話またはメールなどにてご連絡ください
※取材に関して費用等は一切かかりません

募集や告知などの情報を無料で掲載しています

一般財団法人メルディアが発行する「月刊メルディア（本誌）」では、障がい者を雇用する企業や団体、各種の養護施設または学校などの募集ごとや告知などを無料で掲載しています。「知的障がい者を雇用したい」「障がい者施設で開催するイベントを告知したい」などがありましたら、下記の一般財団法人メルディア事務局までお問合せください。掲載に関しましては情報ページ用の「フォーマット」をご用意してあります。フォーマットに則して広告内容を準備していただく必要があります。掲載基準ならびに掲載フォーマットにつきましては事務局までお問い合わせください。

一般財団法人メルディアの活動方針ならびに本誌の編集方針にそぐわない内容、冊子の配置協力をお願いしている各企業の基準に抵触する内容、営利目的のみの内容、特定の宗教や信条に関わると判断される内容、反社会的と判断される内容、公序良俗に反する内容等については掲載をお断りする場合があります。あらかじめご了承ください。

一般財団法人メルディアへのご支援とご協力を募集

障がいのある子供を持つ親の苦労や将来への不安は、他の人には計り知れないほど大きなものがあります。さらに、それが寡婦・寡夫家庭であった場合、経済的な負担、苦労、不安なども一人で背負わねばならない状況に置かれることもあります。

私たち「一般財団法人メルディア」は、会報誌「月刊メルディア」を通じて、誌上に厳選した有益な情報を掲載することで、周囲との情報交換もままならずに不安を抱える人たちの情報源として、その一助となれることを目指しています。

私たち「一般財団法人メルディア」の活動に対するご支援（取材協力・協業の相談・各種支援・支援金・寄付）など、当財団の趣旨に賛同してご協力を頂ける企業・団体・個人を募集しています。下記にある当財団の事務局までご相談ください。

お問い合わせとご相談はこちら　一般財団法人 メルディア

〒163-0632　東京都新宿区西新宿 1-25-1　新宿センタービル 32F
一般財団法人メルディア 事務局／担当：鷺坂（さぎさか）宛て
TEL : 03-5381-3213　／　MAIL : org@gf-meldia.com

一般財団法人
MELDIA

■知的障がい者を雇用する（雇用予定を含む）企業、団体、各種の養護施設や福祉法人・団体の催事やイベントなどの情報掲載を希望される場合は、一般財団法人メルディア事務局までお問い合わせください。　■本誌の設置協力を頂いている企業や団体による設置前の「事前審査」により、掲載が不可能な場合もあります。掲載ガイドラインや記事のフォーマット等に関しましても一般財団法人メルディア事務局までお問い合わせください。

湘南ベルマーレ
ホームゲーム観戦チケットプレゼント

©湘南ベルマーレ

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と、介添者の方１名を湘南ベルマーレホームゲームに抽選でご招待いたします！

■ホームゲーム一覧

開催日	キックオフ	対戦相手	申込〆切
8/11 （土祝）	19:00	横浜F・マリノス	7/28 （土）
8/19 （日）	19:00	ヴィッセル神戸	8/5 （日）
8/26 （日）	19:00	FC東京	8/12 （日）

■応募から観戦までのステップ

STEP 1 応募
HP の応募フォームへ必要事項をご入力
応募フォームはこちら
https://meldia.org/privacy/ticket/
ホームページからも応募できます
財団 メルディア 検索

STEP 2 メール
応募完了メールが届いたら受付完了
ドメイン指定をしている方は「org@gf-meldia.com」を指定メールアドレスに追加してください。応募後、5 日経っても応募完了メールが届かない場合は恐れ入りますが下記お問い合わせ先までお電話くださいますようお願いいたします。

STEP 3 抽選
当選者へチケットをお送りします
当選者の方へ当選メールを送信後、応募フォームにご入力頂いたご住所宛にチケットをお送りいたします。
当選発表はメールの送付をもってかえさせていただきます。

STEP 4 観戦
スタジアムへ GO ！
チケットに記載のゲートよりご入場ください。
どうぞご観戦をお楽しみください！

※当財団はチケットプレゼントのみ提供いたします。試合当日のご案内はいたしかねますので予めご了承ください。なお、会場内で生じたトラブル等に関しては一切の責任を負いません。あわせてご了承ください。

ACCESS
Shonan BMW スタジアム平塚へのアクセス　詳細は湘南ベルマーレ HP をご覧ください

JR 東海道線平塚駅、小田急小田原線伊勢原駅よりシャトルバス、路線バス運行

圏央道寒川南 I.C. より湘南銀河大橋、国道 129 号線経由で約 15 分 (国道 129 号線に随時「総合公園へ」の看板あり)

駐車場は台数に限りがありますので予めご了承ください。

■お問い合わせ先■
一般財団法人メルディア 事務局　担当：鷺坂（さぎさか）
TEL 03-5381-3213　受付時間▶月曜日～金曜日　9：30 ～ 18：30
※抽選結果に関するお問合せにつきましてはお答えしかねますのでご了承くださいませ。

09 MELDIA CONTENTS 2018 SEP.

01｜知的障がい者を応援！
一般社団法人 朗真堂 編

06｜一般財団法人メルディアとは？
メルディアの基本理念、財団概要、支援事業

07｜布施博が訊く
社会福祉法人 武蔵野千川福祉会 編

11｜社会福祉法人訪問
認定特定非営利活動法人 Ocean's Love

15｜水越けいこ連載「M size / はじまり」
水越けいこが愛息・レイくんとの日々を綴る

17｜社会福祉法人訪問
社会福祉法人 足利むつみ会／ピーターパン 編

21｜つむぐ ～こえをきく～
知的障がい者の声を聞く

23｜THE 取材!
障がい者と災害について考える

25｜障がい児向けキッズヨガ教室
スタジオ ラス／株式会社 ネクスト イノベーション

27｜イベント情報と店舗情報・その他
知的障がい者が働く施設や団体の情報・店舗情報など

28｜募集と告知
取材先募集と協賛の募集など

MELDIA 9 月号　2018 年 7 月 25 日発行
発 行 元 ／ 一般財団法人メルディア事務局
発 行 人 ／ 小池信三
事 務 局 ／ 榎本喜明（三栄建築設計）、鷺坂浩章（三栄建築設計）
編　　集 ／ 株式会社サン・オフィス
編 集 人 ／ 東宮恵美
編 集 長 ／ 山口慎市
進　　行 ／ 東宮恵美、山口慎市、谷田貝亘介（新村印刷）
編 集 部 ／ 東宮恵美、都筑亮太、村田保則、渡邊希望
ライター ／ 水越けいこ、布施博、山口慎市、渡邊希望、横関寿寛、大橋はるか、金子智昭
カメラマン ／ 吉岡晋（PMJ）、渡邊希望
ヘアメイク ／ 鳥取まりこ
デザイン ／ 有限会社フレッシャー・アド
印刷製本 ／ QREAS株式会社
協　　力 ／ MELDIA GROUP 株式会社三栄建築設計、一般社団法人 朗真堂、社会福祉法人 武蔵野千川福祉会、認定特定非営利活動法人Ocean's Love、社会福祉法人 足利むつみ会、阿由葉洋平、セルプ絆、改田恭子、ピーターパン、株式会社 ネクストイノベーション、スタジオラス、有限会社瀬谷新聞店、株式会社TDPミュージックパブリッシャーズ、PHOTO MIO JAPAN、新村印刷株式会社
※敬称略／順不同

本誌の無断転載・複製を禁じます
2018©All Rights Reserved. 一般財団法人メルディア＆月刊メルディア
MELDIA GROUP 三栄建築設計／サン・オフィス

次号予告
MELDIA VOL.10
2018 年 8 月 25 日
発刊予定

一般財団法人 メルディア
〒163-0632
東京都新宿区西新宿 1-25-1
新宿センタービル 32F
一般財団法人 メルディア 事務局
TEL：03-5381-3213
MAIL：org@gf-meldia.com